論文

大分県下の清正公信仰に関する一考察
– 細川家との関りを中心に –

福　西　大　輔

１、はじめに

清正公信仰とは戦国武将・加藤清正（1562-1611）への敬称を込めて「清正公」と呼び、神あるいはそれに準ずる存在として祀る信仰である（福西 2012）。加藤清正は、戦場の旗印に『南無妙法蓮華経』の文字を用いるほどの熱心な法華経信者としても知られている。こうしたことから法華経の守護神的存在として日蓮宗寺院、特に加藤清正が治めていた熊本にある日蓮宗・本妙寺を中心に広く、全国で祀られている。また、清正公は現世利益の神として信仰され、特に武運長久、商売繁盛、そして、ハンセン病などの病直しのご利益があるとして庶民から権力者まで幅広く信仰を集めていた。

加藤家の後を継いで肥後藩を治めた細川家も加藤清正を敬ったという伝承が数多く残されている。また、江戸時代の随筆集である『翁草』には肥後藩で天明７年に打ちこわしが起きた時、その首謀者の一人が清正の亡霊だったという噂が広がったことが記載され、細川家が加藤清正の霊を恐れていたという話も書かれている（福西 2012 p102 ～ 106）。

そして、清正公は江戸中期以降、清正ゆかりの地を中心に加藤家所縁の人々から庶民、軍人、支配層と幅広い人々に全国で信仰されていった。

明治維新後は神仏分離令の影響もあり、神道という形で清正を祀るものも数多く見られるようになる。加藤神社（錦山神社）を中心に広がっていった。そして、近代以降になると、加藤清正の像を作り、それを通して顕彰するという動きも出てくるようになる。特に日清・日露戦争以後、清正公は戦神として盛り上がっていった。

大分県内にも数多く清正公を祀る寺社があり、高原三郎は『大分の神々』の中で、ハンセン病との関りの中で広がったのではないかと述べている（高原 1974 p168 ～ 169）。全国的を見ていくと、時代や地域によって、清正公信仰が広がった理由は、多様であることが分かってきている。

そこで改めて、大分県内の清正公信仰の広がりと、その背景を検討してみたい。

２、全国の清正公信仰の概観と大分県下の特徴

全国の清正公信仰の数を把握するための資料としては、高野信治の「武士神格化一覧（上・下）」（高野 2003、2005）と『日蓮宗寺院大鑑』（池上本門寺編 1981）がある。「武士神格化一覧・稿（上・

下)」によれば、清正を祀る神社は142社あるという。一方、清正を祀る寺は『日蓮宗寺院大鑑』によれば、228寺がある。だが、実際にこの二つで清正公を祀る寺社を網羅的に把握できているかといえば、難しいところもある。例えば、清正を祀る日蓮宗以外の寺院、山形県鶴岡市の曹洞宗天澤寺のようなものは、これらの資料からは外れてしまう。しかしながら、この二つの資料は、全体把握のためには貴重なものであり、清正公信仰の傾向を分析する上で有効な資料だと考える。それをもとに清正公信仰の多い地域を分析すると、下記の通りになる。1位は熊本県、2位は福岡県、3位は大分県、4位は東京都、5位は長崎県、6位は愛媛県、7位は新潟県と京都府、そして9位は愛知県、神奈川県、千葉県となった。この順位を検討していくと、加藤清正所縁の地と、日蓮宗との関りが深い地、そして、人口の多い土地に集中している傾向が見られる。熊本県は加藤清正が統治した場所であり、愛知県は生まれ場所である。千葉県は日蓮が生まれた土地であり、日蓮宗が盛んな土地でもある。

3位になった大分県は肥後藩の鶴崎などの飛び地があったことが知られている。上記の統計によれば、大分県内にある清正公を祀る神社は37社、寺院は12寺となっている。

この統計をもとにいえるのは、大分県内に祀られる清正公は神社に祀られているものが多いということである。これは大分県内の仏教の宗派別割合と関連があると推測される。大分県がまとめたデータによれば、県内では、浄土真宗本願寺派が圧倒的に多く、県内の24%近くを締めている[(1)]。日蓮宗は3%程度しかなく、そこで祀られることの多い清正公の数も少なくなる。こうしたことが、他の都道府県に比べて、寺で祀られる清正公の数が少ない要因だと考えられる。

しかし、大分県下を実際にフィールドワークしているともっと多く清正公を祀っている寺社があるように思われる。そこで、大分県下に特化した資料をもとに改めて清正公信仰を見ていきたい。まず、日蓮宗大分県教化センターが出している『日蓮宗大分県ゆかりの神さま仏さま』（日蓮宗大分県教化センター 2017）に掲載されている「大分県内各寺院・教会にて勧請されている主な諸仏諸尊並びに平成30年度の主な年中行事一覧」を見てみた。県内の主な日蓮宗の寺院は40寺あり、その内、20寺が清正を祀っているという。この資料に基づけば、半分の寺院が祀っていることになる。すでに前述の資料と差が出ている。この資料を読み解いてくと、清正公を祀る日蓮宗の寺は、日田市は1寺、中津市は3寺、豊後高田市は1寺、杵築市は1寺、日出町は1寺、玖珠町が1寺、大分市は6寺、由布市は1寺、臼杵市は1寺、佐伯市は2寺、豊後大野市は1寺となっている。大分市内が最も清正公を祀っており、ついで中津市、そして佐伯市となっている。

また、清正公を祀る神社については、先の高原三郎の『大分の神々』によれば、県内に31社の清正公を祀る神社があるという。日田市には4社、中津市には1社、豊後高田市には8社、国東市には3社、宇佐市には2社、杵築市にも2社、日出町に1社、大分市は2社、由布市は3社、竹田市が1社、九重町が1社となっている。神社としては豊後高田市が最も多く、次いで日田市、国東市、由布市になっていることが分かる。高野信治の「武士神格化一覧（上・下)」の37社とずれが出ている。その原因の一つとして、寺に造られた清正公を祀る神社を寺として数えるか、

神社として数えるかなどの違いがあった。

いずれにしても大分県内に均等に清正公信仰が広がっているのではなく、市町村による差があることがわかってきた。清正公信仰が全国に広がりはじめたのは、江戸時代以降であることから、大分県内に広がったのも同じころだと考えられる。江戸時代、県内が諸藩に分かれていたことの影響が大なり小なりあったと思われれる。大分県は江戸時代、杵築藩・（高田藩）・日出藩・日田藩・森藩・府内藩・臼杵藩・佐伯藩・岡藩・（豊後高松藩）に分かれていた。

こうしたことを考慮しながら、大分県内における清正公信仰について、『日蓮宗大分県ゆかりの神さま仏さま』や『大分県の神々』をもとにフィールドワークなどを行った。その成果をまずは市町村別に見ていく。

３、大分県の清正公信仰の諸相

（１）中津市の清正公信仰　－大法寺を中心に－

中津市では日蓮宗の寺院、大法寺、秋月寺、真浄寺などで清正を祀っているという。その中でも清正公信仰の中心は大法寺である[(2)]。大法寺は中津城の東側にある寺院が立ち並ぶ寺町と呼ばれる地区にある。

妙顕寺末日蓮宗一致派に属し、眞淨山と号する。文禄３年（1594）、大法院日周上人によって開山し、慶長５年（1600）に建立されたといわれている。参道に題目塔が建ち、右手に鬼子母神像が祀られている。境内には婦人病平癒にご利益があるとされる秋山自雲霊神を祀る秋山堂、そして清正公を祀る浄池宮が建立されている。「浄池」は、熊本の本妙寺にある清正公を祀る霊廟の名である。

境内には、他に由井正雪が植えたとされる塩釜桜の大樹や、中津藩主・小笠原家と縁戚のあった浅野家家臣・大石内蔵助が奉納したと伝えられる石灯籠がある。墓地には、種痘を行った辛島正庵一族の墓などもある。

清正公を祀る浄池宮は、正面の蟇股に加藤家の家紋である蛇の目と桔梗の紋が入っている。清正公は正式には「清正公大神祇」と称している。お宮の中には、左側に厨子があって、僧侶立像が祀られ、中央から右側に御殿造りの神棚があり、その中央に衣冠束帯姿の清正公坐像、向かって左に大黒天像、右に三十番神が祀られている。堂内の壁には床几に座る清正像の押絵や清正公の御闔詠歌が書かれた額が飾られている。清正公の御闔詠歌は、堂内に置かれた御神籤箱のくじの数字によって決まる。

清正公のご縁日としては23日・24日とされており、文武両道、学業成就、開運勝利の功徳が得られるといわれている。祈願文は「除其衰患・令徳安穏・遊行無畏・如師子王・南無妙法蓮華経」という。近年では、７月23日・24日に近い第２日曜日を清正公御祭礼の日として、ほうろく灸などを行っている。

この浄池宮がどのような経緯で出来たのか分かる資料も伝承も管見の限り残っていない。「浄

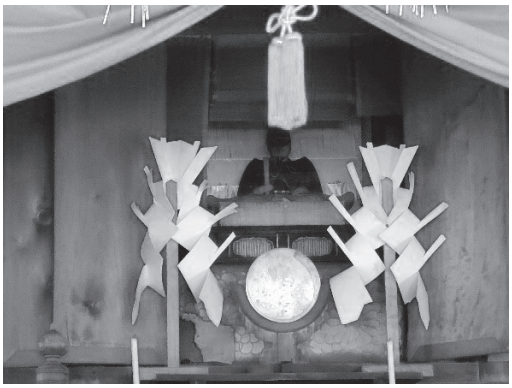
池宮」という名称から本妙寺から、それも明治維新前に分霊してきた可能性は高い。清正公は現在では法華経の守護者として位置付けられている。ご住職の話では、現在のようにお寺を整備したのは先々代の住職の時代であるといい、こうしたことから日清・日露戦争とも関りがあるのではないかという。つまり、戦勝祈願の一環で浄池宮を整えた可能性があるとされ、浄池宮の前にある鳥居と常夜灯からは裏付ける要素が見られる。鳥居の扁額には「鎮護国家」と刻まれ、常夜灯には「明治 30 年」の年号があり、日清戦争との関りで整備されたと推測される。

これらのことを総合して考えると、大法寺が建てらえた慶長 5 年（1600）は、細川忠興が中津藩に入封した年であり、細川家の影響が大法寺の建立にあったと思われる。だが、その時代に加藤清正は亡くなっておらず、清正公信仰は成立していないことから寺が創立した当初から浄池宮があったとは考えにくい。少なくとも小笠原家が中津藩を治めるようになってから以降に浄地宮がつくられたと考える。

小笠原家は、加藤清正を敬ったといわれる細川家と関りが深い。細川忠利は加増移封により中津藩から肥後藩に移るが、その後、中津藩を継いだのが小笠原忠真である。小笠原忠真は、細川忠利の義兄弟であった。こうした繋がりから、小笠原家が、細川家が大事にしてきた清正公信仰を取り入れ、大法寺で祀った、あるいは祀ることを認めたのではなかろうか。そして、清正公信仰は明治維新を経て、日清戦争以後、武運長久の神として大法寺で信仰されてきたのではないかと推測する。しかしながら、現状ではもっと時代が下ってから浄智宮が造られた可能性も否定はできない。

また、高野信治の「病傷治癒信仰のなかの武士　－＜治療神＞という見方－」によれば、中津市桜町の天満社の境内にも錦山神社があり、そこでも清正公を祀っているという。高野の論文によれば、ここはハンセン病と関りがあると記している（高野 2019 p20 ～ 21）。

浄池宮



清正公像

（2）豊後高田市の清正公信仰　－真玉八幡宮の境内社・錦山社を中心に－

豊後高田市内には、城山鬼子母神像で有名な日蓮宗寺院・法華寺などに清正公が祀られている。そして、真玉八幡宮の境内社に清正公を祀る錦山神社がある[(3)]。

真玉八幡神社は八幡三神、足仲彦尊（仲哀天皇）・誉田別尊（應神天皇）・息長足姫命（神功皇后）を祀る神社である。由緒としては、養老４年（720）に大隅日向両国の隼人族が叛逆したので、朝廷は宇佐八幡宮へ勅使を立て、神宮は神輿を奉じて征討した。真玉庄の住人であった大神源内は、度々の戦功をたて、陣中で宇佐八幡宮を真玉庄に勧請すべき霊告があったことを切っ掛けに建立されたといわれている（大分県立歴史博物館 2018 p15）。

この真玉八幡宮は、慶長５年（1600）に細川氏が入封した際、その家臣である魚住氏が再建したという資料も残っており、細川家との関りがある神社でもある。その境内に加藤清正を祀る錦山社が境内社としてある。

現在の錦山社は覆屋があり、両脇には僧侶が火袋を持った姿の常夜灯と狛犬がある。火袋には、加藤家の紋である「蛇の目紋」が刻まれている。社殿は木造づくりで、蟇股や側面の一部にも加藤家の紋である「蛇の目紋」そして、背面には「桔梗紋」が刻まれている。

この錦山社に関しては「真玉八幡宮関連資料」の一つである「浄池院殿清正大神儀縁起」に詳細が残されている。これによれば、嘉永２年（1849）に元大庄屋の真玉与八郎が中心となり、熊本から清正を勧請するための働きかけを行い、翌年の３月には成就したものだという。

また、清正公を祀る神社が「錦山」と呼ばれるようになるのは、神仏分離令によって、本妙寺から清正の霊が熊本城近くの錦山に神社が造られ祀られるようになってからである。つまり、明治４年（1872）以降となる。こうしたことから嘉永２年に清正への信仰がはじまり、近代になってからも信仰が続いていたことが分かる。

錦山社

蟇股に見られる蛇の目紋

（3）姫島村の清正公信仰　―清正公社を中心に―

姫島村の清正公信仰の中心は「清正公社」である。姫島の「達磨山」の山頂に「清正公社」がある。達磨山は島の西部にある海抜105mの山であり、達磨の座禅した像の形に山の姿が似ている所から命名されたといわれている。「清正公社」は、村民に「せいしょこさま」と親しまれている。鳥居には「加藤社」と書かれている。

もともとは、加藤清正と姫島には直接的な繋がりはなく、島民に清正公の熱心な信者がおり、その人が祀ったのが始まりだといわれている。現在、地元では勝負運の御利益がある神社として、信仰されている。4月29日に「清正公祭り」という大祭が行われるという。

（4）国東市の清正公信仰

国東市における清正公信仰の中心となる寺社を把握はできていないが、国見町を中心に清正公を祀る小社が点在していることは確認できた。これらの社では清正公だけでなく、ほかの神々と一緒に祀られていた[(4)]。

①　国東市国見町伊美　清正公社

集落の山の手にある神社で石像の仁王像がある清正公神社がある。由来は分かっていないが、かつては4月29日にお祭りをしていたという。また、祭りの時には、神社の近くで相撲の奉納などがあった。今では、集落の人が数人で草刈りなどの面倒をみている程度だという。

②　国東市国見町鬼籠　田中社境内末社　清正公

鬼籠のうち肆（みせ）集落にある神社で、境内には2つの入口がある。1つの入口近くの鳥居には「文化三年」の銘があり、「田中社」の扁額がある。本殿横に多くの祠があり、その一つの石製祠に「清正公」と刻まれ、その前には笠の部分に蛇の目紋の入った常夜灯がある。神社の拝殿にある由緒書きによれば下記の通りである。

田中社の由来

天満社　菅公を祀り芸能学問成就の神

荒谷天神森に元禄四年二月廿五日刻銘の石祠あり

大願主屋敷忠右ヱ門　六角石灯籠享保五子天

願主屋敷庄左衛門　明治

21年この地に奉遷

妙見大明神　北辰を祀り農耕狩猟の刻を司る

この地に鎮座創建永禄　暮春吉日鬼籠氏子中

山神宮　狩猟農事の神

堂前より奉遷　山神宮田あり

創建寛政二庚申天十二月吉日　吉兵衛滝平

金毘羅神 海上守護の神

文化十一年甲戌三月奉再建　吉兵衛儀作

明治 31 年金毘羅山より拝殿をこの地に移す

瑜伽大権現　土匠の神

元引石に新坐　文化九年壬申八月吉日

創建　仲右衛門他

清正公　加藤清正を祀る　武神疫神

天保九歳戊戌二月創建佐藤円平氏子中の刻銘あり

元光月に鎮座　江月庵の水鉢あり

昭和 52 年　仲秋吉日

総代　末綱杵一　中島依夫　一丸隆

上記の内容からは江戸時代末に清正公が病除けの神として祀られていることが分かる。

また、清正公が妙見菩薩（大明神）と一緒に祀られていることは興味深い。清正は妙見菩薩のご加護で生まれた、妙見菩薩の化身だという話も伝わっているからである（福西 2012 p149）。

「旧高旧領取調帳」に記載されている明治初年での国東郡のうち、熊本藩預地となっている村は鬼籠村、西中村、東中村、上岐部村、中岐部村、下岐部村、岩戸寺村、堅来村、深江村の 9 村である。鬼籠村は田中神社のある地区のことで、江戸時代の終わりには熊本藩預地になっており、細川家の影響を強く受けていたことが想像される。こうしたことがこの地に清正公を祀る祠を造ることに繋がったと考えられる。

清正公

祠蛇の目紋の入った常夜灯

③　国東市国見町竹田津字天の松　清正大神（天満宮）

清正大神は川沿いにある民間に隣接した土地で、加藤清正を祀る祠を中心に十数の祠が祀られている。「天満宮」や「宗忠神社」そして「土公神」と刻まれた祠や恵比須像などがある。参道の入口近くには鳥居の一部が残っており、それには「明和九年七月吉日」と「疱瘡安全之□」と刻まれている。その近くには「清正大神儀」と刻まれた石柱が建ち、この社の中心が清正を祀るものであったことが分かる。疱瘡などの病気と関りが深い神社でもあったと考えられる。

清正公大神儀と記された石柱

祠群

このように見てくると、田中社と清正大神（天満宮）では合祀が進んでおり、本来の清正公信仰の形が分からなくなっている。しかしながら、両方とも病直しの神として信仰されてきた形跡があった。病の流行が落ち着くとともに信仰が忘れ去られる、いわゆる流行神的側面が見られた。清正公信仰の持つ一つの特徴が出ているように考えられる（福西 2012 p97 ～ 151）。

（5）別府市の清正公信仰

別府市内で、現在、清正公信仰があったことはあまり知られていない。しかし、幾つかの寺社では、かつて清正公信仰が盛り上がったことを匂わせるものが残っている。また、別府市を主戦場とした石垣原合戦において、黒田家に加勢するため、加藤清正が肥後から出陣したが、勝敗が決まったので、「旗ノ台」という土地で引き返したという伝承も残っている。

こうしたことをふまえて、別府市内の清正公信仰所縁の地を見ていきたい。

①　別府市松原町　住吉神社

朝見川が流れるところから 100m 程南に住吉神社はある [(5)]。祭神として表筒男命・中筒男命・底筒男命・気長足比売命、そして、清正公を祀る。由来として宝永の始め、江戸中期（1744）頃、大阪に向かった別府の舟人・四右衛門が伊予沖で大暴風に遭ったが摂津・堺の住吉大神に祈願し

たところ、風雨が収まり、無事、大阪に到着出来た。その後、永井右京と言う人が住吉宮を別府の地に御勧請し、宝歴 4 年（1757）、万登浜に鎮座する。その後、寛政 3 年（1792）頃、現在の地に鎮座された。

そして、松原の地に鎮座していた清正公を明治 10 年（1978）に、この本社に合祀した。その後、神社は村社として位置付けられる。

現在ある神社の鳥居は明治 16 年（1883）に造られたもので、燈籠は大正元年（1912）、そして、狛犬は大正 12 年（1923）に奉納されたものである。また、境内末社としては蛭子神社がある。

この神社の主な行事として夏季大祭がある。浜脇港で、毎年「海上渡御振興祭」と称して行われる。航海の安全と大漁を祈願するお祭りで、白装束の若者や、地域の人たちが神輿を担いで神社を出発し、約 4 時間かけて浜脇港に到着する。神輿を乗せた船は大漁旗をたなびかせ、約 1 時間半かけて別府湾をまわる。船は近くの楠町に入港し、神輿は別府駅周辺や南地区を巡って、神社に戻る。

住吉神社の大祭を見る限り、清正公との関りが見られない。住吉神社に合祀された理由も分からない。また、何故、松原の地で清正公が祀られるようになったのか、管見の限り、詳しい資料はない。だが、後述する本光寺の歴史からは、ある程度推測できた。

住吉神社

② 別府市山の手町　本光寺

本光寺は日蓮宗の寺で、山号を慈照山という。由来は、清正公堂を別府一円に疫病が流行した際、首藤治郎兵衛の発願により慶應 3 年（1867）に建立したのがはじまりだとされている [(6)]。

ご住職の話では、現在の土地（山の手町）に来る前、この寺は別府市立田町にあったという。立田町は、清正公を祀る住吉神社のある松原町の近隣となる。本光寺は清正公を祀るお堂と、本堂を別々に持っていた。ところが神仏分離令などの影響により、寺（本堂）だけが移転し、清正公を祀るお堂は松原町に残されたという。

現在地では、本堂に久遠実成本師釈迦牟尼仏を中心に祀り、鬼子母尊神・妙見大菩薩・行覚院日朝上人、そして清正公などを祀っている。

本光寺にある清正像は衣冠束帯姿で、毎月 23 日にお祀りしている。今は、病除けの神というよりも日蓮宗の題目を守る神として信仰されているという。

本光寺の清正公は、寺の開山と深い関りがあったが、神仏分離令の影響で、寺（本堂）だけが移転した。そのため、清正公を祀るお堂が残され、それが後に住吉神社に合祀されたと考えられる。

このように見てくると、別府市の清正公は、庶民によって流行り神的な扱いを受けてきたの

ではないかと推測できる。安政４年（1858）に別府周辺でコレラを患うものがおり、浜脇村では37～38人死去したという記録がある。本光寺が建てられたのが慶應３年（1867）であり、この寺の前身が別府市立田町にあったことと、寺の由緒から考えると、コレラを抑えるために庶民の手によって清正公が祀られはじめたと考えられる。それが時代の変化に合わせて、仏教的な形と、神道的な形に分かれて、祀られるようになったと考えられる。

その一方、別府市内の清正公信仰の広がりは、石垣原合戦に伴う清正の伝承、「旗ノ台」伝承の影響も否定できない。「旗ノ台」伝承とは、慶長５年（1600）９月、大友義統と黒田如水が石垣原で戦いを始めた時、肥後にいた加藤清正が三千余騎を引きつれ、鳥居峠を経て鶴見岳の麓に陣を取り、その戦いの様子を見て、黒田方が勝利するのを確かめて、帰途にいたという話である。

③　別府市南立石　旗ノ台　清正像

鶴見岳ロープウェイの麓駅近くに昭和27年（1952）に作られた清正像がある。題目を刻んだ碑と２体の甲冑姿の清正像、そして祠が並び立っている。傍には日蓮上人像も建てられている。それぞれの前には常夜灯と線香立てがあり、現在も信仰の対象となっていることが伺える。

これらの像の由緒は下記の通りである。

史跡　旗ノ台由来
慶長五年秋九月石垣原合戦は　関ケ原の合戦と相待て天下分け目の戦となり
当時豊臣方大友義統と徳川方黒田如水軒孝高と石垣原に於いて
九月十日佛暁より大激戦となりました
其の戦に肥後城主加藤清正は三千余騎を引きつれ九月十三日鳥居峠を待て
本隊は当地に陣取り　戦の様子を見て　黒田方勝利を確かめて帰途につきました
南無妙法蓮華経の旗を立てたので地名を　旗の台と称するに至る
加藤清正滅亡後昭和二七年は三百四十年になり
其の間由緒ある土地が一片の荒堅と化し
世間よりかへりみられなかったのを遺憾として其の筋の許可を得て
地方有志発起人等相計り
此の地に加藤清正公の石像を建立し
公の信条たる天下泰平国土安穏五穀成就交通安全を表現し
三百四十三年記念をあわせて講和篠約契期として
日本国独立将来興隆を祈願する
ここに旗の台の由来を略記す

昭和二十七年五月
別府市旗の台保存会

この像が作られた昭和 27 年は別府市が戦後になって、観光地として改めて売り出し時期でもあった。前年に国際観光道路の工事が着工され、国際観光港が出来上がった。そして、昭和 27 年 4 月には別府市観光協会が発足している。別府市の地域アイデンティティの一つとして、「旗ノ台」に関わる伝承が一部の人に再評価された。

また、熊本県や愛知県などでは近現代になると、寺社を造るのではなく、銅像などの像を建てて、清正公を顕彰する近現代的な清正公信仰が広がる（福西 2012 p189 ～ 200）。この「旗ノ台」の清正像もこうした近現代的な清正公信仰の一つの形だと考えられる。

「旗ノ台」伝承も別府市、あるいは大分県における清正公信仰を広げる要因になっていた。

（6）由布市の清正公信仰　－大将軍神社を中心に－

由布市挾間町の大将軍神社に清正公は祀られている[7]。この神社の祭神は、保食神・伊邪那岐神・岩長姫神・阿須波神・波比岐神・市杵島姫神・素戔嗚命・崇徳天皇・大歳神・武岩立神・櫛稲田姫命・大山津見命・天水分命・大国魂神・菅原神・倉稲魂神、そして、清正公になっている。

大正 13 年（1924）に大将軍神社は郷社となった神社で、牛馬の神、農耕・交通の神として信仰されてきている。参道には狛犬のほか、牛馬を模った像が置かれている。拝殿の天井画にも牛馬が描かれている。

この神社は、地元では通称「大将軍（だいしょうごん）さま」と呼ばれ信仰されている。もとは京都に鎮座していた保食神・伊邪那岐神・岩長姫神を加賀国篠原村に遷座したものだといわれている。それが寿永年間（1182 ～ 1184 年）に、源平争乱に際し、安寧ではなくなった加賀を脱して、社司・加藤兵部太夫が豊後国姫島に移ったのがはじまりだとされている（二宮 2020 p2 ～ 19）。そして、ある夜、「一里東南方に清潔なる高山ありその山頂に遷座せよ」と神託があり、太夫はただちに同山に奉遷し、故郷の名を取り、同地を篠原と名付け、小倉山三柱神と称したという。この大将軍神社は小倉山の一角にあり、この辺りは古くは修験の場でもあったといわれている。

江戸時代、由布市の大部分は岡藩に属していたが、挾間町谷地区などは肥後藩の飛び地となっていた。そのため、細川家と深い関りが生まれ、この神社に関わるような伝承も生まれた。細川綱利が参勤交代で野津原まで来た時、馬の元気が急になくなり、前へ進もうとしなかった。そこで、大将軍神社に祈願すると、馬は元気になった。綱利はお礼参りをし、その後も神輿などの奉納を行ったといわれている。伝承では「細川綱俊」とされていることもあるが、同音の「綱利」の誤記だと考えられている。

現在、大祭は 1 月 13 日・14 日に行われている。農耕にかかせなかった牛馬の安全や健康を祈るお祭りとして位置付けられ、無病息災を願う人々が参りに訪れる。新型コロナ感染拡大にともない、近年は大祭でも神楽の奉納や餅まきなどが中止となっていた。

また、神社の宝物としては細川家が奉納したという神輿が残されており、それには細川家の九曜紋が刻まれている。

この神社に清正公が祀られたのは明治期だといわれている。資料によれば、崇徳天皇・大歳神・武岩立神・櫛稲田姫命・大山津見命・天水分命・大国魂神・菅原神・倉稲魂神、そして、清正公は、小野村堀之内に鎮座していた。それを明治 12 年に「保食社」と呼ばれていた大将軍神社に合祀したという。

合祀された理由については分からないが、大将軍神社に残る細川家の伝承とも関りがあると考える。すなわち、細川家によって守護されてきた大将軍神社だからこそ、同じく細川家が重んじた清正公を合祀しても良いという理由が生まれたのではないかと推測する。また、小野村で清正公が何時から祀られたのか、何故祀られていたのかは管見の限り、分からない。

現在、社殿の前には、細川家ゆかりの九曜紋の入った手水鉢が残されており、細川家と深い繋がりがあったことが今も分かる。

大将軍神社

九曜紋の入った手水鉢

（7）玖珠町の清正公信仰　―成覚寺を中心に―

玖珠町の清正公信仰は、日蓮宗寺院、理性山・成覚寺などが中心となっている。成覚寺は寛永元年（1624）に瀬戸内海から移転して建てられたといわれている。学泉院日泰上人（法心寺第 2 世）を迎え、森藩・久留島家の外護により建立されたといわれている。

明治 16 年（1883）12 月 23 日に森町は大火に襲われるが、成覚寺のみが残ったという。その時、本堂の屋根の上に三十番神が姿を見せたという話が伝わる。

成覚寺には釈迦牟尼佛をはじめ、日蓮大聖人像、鬼子母尊神、三十番神、大黒天神、秋山自雲霊神、そして清正公が祀られている。

平成 30 年には 7 月 20 日に清正公祭を開催している。

成覚寺が森藩で開山する際に、大分県の清正公信仰の中心である法心寺の日泰上人を迎えたことが、この地に清正公信仰を広げた要因の一つになっている。また、石垣原合戦の際、加藤清正が玖珠郡引地村まで出陣していたという話の影響も考えられる。

（8）大分市の清正公信仰

大分市内の日蓮宗寺院、本光寺、妙端寺、法心寺、蓮華寺、妙見寺、法護寺などで清正公が祀られている。大分市内が、県下で最も盛んに清正公を祀っていると考えられる。

大分市内には、江戸時代、「肥後街道」（豊後街道）と呼ばれる熊本城から鶴崎の港までを結びつけた道が通っていた。肥後藩が参勤交代の時に使っていた道で、そこは肥後藩の飛び地として扱われていた。この道を中心に大分市内では清正公信仰が広がっている。肥後街道は加藤清正が整備したともいわれており、こうしたことが寺社の分布に影響していると思われる。

①　大分市鶴崎　法心寺

鶴崎は参勤交代の時、瀬戸内海を経て海路、大阪・江戸へ向うための拠点となった港町である。加藤清正は法華経の熱心な信者で、寝泊まりする鶴崎の地にお題目を唱える道場がなくてはならないということで法心寺を建てたと伝わっている[(8)]。慶長6年（1601）に清正が、京都の本圀寺の日榮上人を招き、開山したとされている。この寺には清正が着用した鎧や遺品が残されている。

山号を「雲鶴山」といい、法心寺という名は「妙法蓮華経の1字を付けた」とされ、加藤清正が建立したといわれる五ケ寺の一つとされる。

山門近くには加藤清正の胸像が置かれている。長烏帽子型兜を被った清正像である。本堂の前にはイチョウの木がある。イチョウの木は大分市指定の名木で、別名を「逆さイチョウ」と言われている。本堂建立の時に清正が持っていた枝が育ったもので、枝が逆さに出ているとされている。

そして、本堂の横に清正公を祀る霊廟がある。霊廟は本殿と拝殿からなり、拝殿には「清正公大神儀」と書かれた扁額が飾られている。本殿は彩色が鮮やかな建物となっている。

この霊廟を中心にお祭りが行われる。清正が慶長16年（1611）に病死して以来、清正の命日とされる7月23日に追善供養の法要が行われ、それが現在二十三夜祭として呼ばれている行事となった。鶴崎の夏の風物詩として親しまれている。

二十三夜祭では、様々な行事が行われる。一つが千灯明と呼ばれるものである。千灯明は清正公が大分市鶴崎の港に着く時や出発する時、町民がこぞって灯火や提灯をもって迎えたという故事にならい、供養のため境内に千の灯明を灯す行事である。

もう一つは境内で振る舞われる豆茶である。豆茶は清正が戦場で兵士の士気を鼓舞するため、麦茶に煎った大豆を入れたという伝承に基づくもので、健康に良いとされる。

二十三夜祭は法心寺だけの行事ではなく、地域のものとして「鶴崎清正公二十三夜祭」と呼ばれ、様々なイベントも行われている。国道197号鶴崎駅入り口から国宗交差点までを歩行者天国にして屋台などが出ている。

清正が生きた49年と7月23日の命日にちなみ、49.723mを駆ける「国道1BAN（一番）」が

実施され、多くのランナーが参加する行事にもなってきている。

近年は、新型コロナウイルスの感染拡大にともない行事は中止や縮小していた。

法心寺

清正を祀る霊廟

② 大分市野津原　法護寺・野津原神社

野津原は肥後藩の飛び地で、肥後藩が参勤交代の際に使う宿場町として、江戸時代に栄えた。肥後藩は加藤清正の時代、肥後国（熊本）と豊後国（大分）鶴崎を結ぶ、全長約124kmの道を肥後街道として整備した。その宿場町の一つが野津原にあった野津原宿である[(9)]。

この野津原には清正を祀る寺と神社がある。法護寺は近くの愛宕山にあった日蓮宗の寺を寛文年間（1661～1671年）に細川家が移転させたもので、山号が「鷲城山」である。

この寺には「清正公殿」と呼ばれる御堂がある。清正公を祀ったもので、細川家によって建立されたと伝わっている。

参道を登り、山門をくぐると、本堂の左側に「清正公殿」と呼ばれるお堂があり、そのお堂の角々には加藤家の家紋である「蛇の目紋」と「桔梗紋」が刻まれている。

もう一つが野津原神社である。神社の鳥居の扁額には加藤神社と書かれている。この鳥居は昭和10年に造られたものである。野津原神社は神仏分離令の影響で、法護寺で祀ることができなくなった清正公を明治4年に祀ったものがはじまりだといわれている。この神社のある場所は、江戸時代、藩主が休憩した御茶屋跡があったといわれている。

祭神としては清正公のほか、他の地で祀られていた祇園社の素戔嗚尊などが合祀されている。明治6年には、社格が郷社となった。

野津原では現在、この2か所を中心に清正公を祀っている。

そして、野津原では地域の祭りとして「清正公祭り」が毎年8月23日・24日に行われている。この祭りは、これらの寺社を中心に行われる祭りで、明治初期に清正公を忍んではじまったといわれる。

8月23日を宵宮、24日を本祭りとして、神楽の奉納や神輿・山車の神幸行列などが行われる。

2004年には大山車が復活し、女太鼓隊や子供囃子なども出るようになった。新型コロナウイルスの感染拡大にともない、2022年は奉納神楽のみを実施したという。

清正公殿

野津原神社

③　大分市端登　清正公寺

大野川とその支流である稲積川が交わる場所の近くの小高い丘に清正公寺はある[10]。

日蓮宗の信者が守ってきた清正を祀る御堂である。神像の清正像は、衣冠束帯姿である。由来は不明だが、戦前までは堂守もいた。現在は、近隣の3、4戸で祀っている。平成の初めごろまでは、清正公寺では二十三講の祭りをしていたという。この祭りは現在、完全に絶えてしまっており、この二十三夜講の祭りが清正の命日に由来する行事なのか、月待の二十三夜講なのか、分からなくなっている。また、現在、御堂の裏のがけ崩れが起きてきており、御堂の維持が近々の課題となっている。

このほかにも大分市内にある日蓮宗の妙親寺には、清正公随身の祖師像とよばれるものが祀られているという。また、神社では大分市浜の市にある火王宮の境内にも清正公が祀られている。

清正公寺

清正公寺内部

（9）臼杵市の清正公信仰　―瑞祥教会（こども園）を中心に―

臼杵市では瑞祥教会に清正公が祀られていた。瑞祥教会は、慶長7年（1602）に細川忠興の姫・多羅が、臼杵藩藩主・稲葉一通に嫁入りの時、持ってきた加藤清正像を祀るために建立された[11]。地元では「瑞祥閣」と呼ばれ、竹林山法音寺の別院として位置付けられていた。現在は、建物は竹林山法音寺が運営する保育所型こども園になっている。

瑞祥教会では、かつては毎月23日に清正公御報恩講を行っていた。23日は清正公の命日（お逮夜）だとして、竹林山・法音寺の住職が瑞祥教会にて、講員とともにお経をあげた。その後、参加者たちはお茶会などをしていたという。信者の高齢化にともない、現在は行われなくなり、瑞祥教会もこども園となり、その2階に清正公は祀られている。清正公の神像は衣冠束帯姿で造られている。法音寺のご住職が、こども園に通う子どもたちとともに6月23日に清正公大祭として法要を行っている。

竹林山・法音寺は、同じく慶長7年（1602）に稲葉一通が、小倉城主である細川忠興の姫・多羅を正室に迎えるため、その菩提寺として建立されたといわれている。

しかしながら、この伝承には歴史的な矛盾がある。清正が亡くなるのは慶長16年（1611）であり、伝承の通りだとすると、清正が生きている間に神格化され、その像を多羅が嫁入り道具として持ってきたことになってしまう。また、加藤家と細川家の繋がりは、肥後藩を通して生まれたものであり、それ以前に細川家が清正像を稲辺家への嫁入り道具として持たせる理由がない。

何故、このような伝承が生まれたのか、それを知るための資料は管見の及ぶ限り見つからない。しかし、この伝承が生まれた背景を探る手掛かりはある。加藤家と稲葉家、そして細川家との関係が重要な意味を持っていると考える。

加藤清正の息子・忠広の時代、加藤家は寛永9年（1632）に改易される。その改易の際、徳川幕府の命で、臼杵藩三代藩主・稲葉一通は熊本にある八代城の在番を務めた。そして、加藤家に代わって細川家が肥後を治めることになる。その細川家と稲葉家が、一通と多羅の結婚によって深い縁を結んでいた。

これは加藤家の関係者からみれば、感情的に許しがたいものであり、彼らから細川家と稲葉家は反発を受けかねないものであったと推測される。加藤家改易にともない浪人などが九州を彷徨っている時に騒乱の火種になりかねないものであった。

こうしたことから清正を敬っていることを形にするべく、細川家は稲葉家に娘が嫁ぐ時の嫁入り道具として、清正公の神像を持たせた。そして、稲葉家も、それを大切に祀るために寺も建てたという話が生まれ、語り継がれたのではないかと考える。それを裏付けるように同じく加藤家改易に関わった佐伯藩にも清正公を祀る寺があった。

(10) 佐伯市の清正公信仰　―久成寺を中心に―

佐伯市では、日蓮宗寺院、久成寺と轟教会などで清正公が祀られている。その中でも佐伯市の

旧市街にある久成寺には、清正公御廟所（別名、清正公堂・清正公殿）がある。この久成寺が佐伯市の清正公信仰の中心となっている[12]。

久成寺は佐伯藩の城下町にあり、寺の前の通りは神護寺通りと呼ばれている。久成寺は山号を「碧松山」という。久成寺は日蓮宗六条門流で、京都・山科の本圀寺が大本山となっているが、実際は清正公を祀る霊廟がある熊本の本妙寺の末寺である。本圀寺から見れば「孫末」に当たる。

伝承によれば、正保元年（1644）に日蓮宗信者たちによって、藩主の許可を得て建立され、肥後国の本妙寺より日善上人を招聘したという。また、大阪寺町・久成寺より日蓮像を貰い受け、本尊とした。建立に関った信者たちは「久成寺六人衆」と呼ばれ、尊敬を集めた。

現在、陸軍の慰霊碑、一字一石塔などがある境内には、日蓮上人像を祀る本堂、稲荷社、碧松明神堂、そして清正公堂がある。

碧松明神堂は龍神が祀られたお堂である。7月7日に碧松祭がなされる。その前日までに清正公堂や碧松明神堂並びに本堂の掃除が行われる。7月7日には、16時からのご開帳法楽の後、地元の人々が喜ぶような、落語会などが行われている。この碧松明神堂の龍神こそが、この寺の信仰の中心で、それを守る寺、神護寺として久成寺は出来たから、久成寺の前は神護寺通りと呼ばれるという人もいる。

清正公は何時から祀られたかは定かではないが、ご住職によれば、本妙寺と縁が深いので、古くから祀られていたのではないかという。現在は、碧松明神堂の裏手に清正公堂がある。

清正公堂の前には常夜灯があり、それには明治36年（1903）の年号が刻まれていることから日清・日露戦争との関りも考えられ、武運長久のご利益が説かれていた可能性もある。お堂の正面横には「蛇の目紋」の入った手水鉢が残されている。

清正公のお祭りは7月23日・24日に行っている。特別な行事はせず、現在は檀家とお祀りを行う。また、高原三郎によれば、久成寺の清正公は失せものを知らすご利益があるとされ、信仰を集めていたという（高原1974 p198）。

この寺は、蔓延元年（1860）に失火で数多くの建物が燃えたことが知られている。その際、古くからの記録の一部が無くなってしまっている。増村隆也の「佐伯雑記（七）」によれば、残されている記録からは、弘化4年（1847）に熊本の本妙寺より清正像を迎え入れたことや、現在の清正公堂は明治20年（1887）に23世日侃によって改築されたことが分かっているという（増村1967 p56～57）。少なくとも弘化4年以降は、現在の形になっていると考えられる。

また、久成寺の檀家の中には旧加藤家の家臣で、弓の名人もいたという話も伝わっている。その人物は清正の息子の時代に起きた牛方馬方騒動で肥後藩を離れ、佐伯藩の毛利家に仕えた人物で、こうした人物が中心となって、清正公を祀っていたともいわれている。

清正公堂

蛇の目紋の入った手水鉢

４、大分県下の清正公信仰の現況と細川家の繋がり

統計上の清正公信仰を見ると、大分県内は神道の形で清正を祀るものが多いが、現在も祭礼行事が盛んに行われているものは、寺院で祀られているものであった。その代表が大分市鶴崎の法心寺の「鶴崎清正公二十三夜祭」である。現在も変化し続ける祭りであった。

一方、清正公を神社という形式で祀るものは、由布市の大将軍神社や別府市の住吉神社、国東市国見町のもののように合祀されているものが多い。これらのものは、明治以降に合祀されたことが分かっている。合祀により配神として位置付けられ、存在感が薄くなり、現在、単独での祭祀を行っているところは少ない。

また、別府市の本光寺と住吉神社、大分市の法護寺と野津原神社のように神仏分離令の影響によって、二つに分かれて祀られたと思われるケースもあった。仏教・神道の両方の形で信仰されている。

そして、大分県内の清正公の祭りは清正の命日とされる７月23日･24日や月遅れの８月23日･24日に集中している。しかし、国東半島のあたりでは、４月29日に行われているものもあった。関東などでは見られる５月５日の端午の節供に行うという事例は、今回の調査では見つけきれなかった。

清正公のご利益としては、武運長久や勝負運などが説かれ、佐伯市の久成寺では、失せものを見つけるご利益があったと説かれているが、今はあまり知られていない。また、清正公と病の関りについては、国東市国見町鬼籠にある田中社境内末社では病除けの神としてのご利益が解かれていた。別府市の本光寺も病除けのご利益は解かれていたようだが、現在ではあまり聞かれなくなっている。そして、高原三郎が指摘するようなハンセン病と清正公の関りは大分県においては、明確にならなかった。

このように見てくると、大分県下の清正公信仰が広がった理由は、庶民がそのご利益を求めた結果というよりも権力者たちが清正公を祀る寺社を大分の地に建立する必要があったからだと考える。その理由は大きく２つに分類される。

１つは、大分に肥後藩の飛び地があったという理由から清正公を祀ったものである。その代表

的なものが、参勤交代の要所であった大分市鶴崎の法心寺に祀られる清正公である。法心寺は、加藤清正が参勤交代の無事を祈って建てた寺で、清正が亡くなった後、清正公を祀る寺になった。それが切っ掛けとなり、鶴崎と熊本を結ぶ肥後街道の宿場町であった野津原に法護寺や野津原神社といった清正公を祀る寺社が出来た。玖珠町にある成覚寺は、法心寺の関係者によって開かれている。

また、肥後藩の預かり地であった国東市鬼籠周辺の田中神社や飛び地となっていたといわれる由布市挟間の大将軍神社にも清正公が祀られている。

このように肥後藩の力が及ぶ土地には清正公が祀られており、大分における肥後藩の力を示す役割があったと考えられる。

もう１つは細川家などのように加藤家と深い因縁があった大名家が、加藤清正を敬っていることを示すものである。まず、細川家との関りが見られた清正公を祀る神社としては、由布市の大将軍神社と、豊後高田市の真玉八幡宮内にある錦山神社である。大将軍神社は、細川家と深い繋がりを持つ神社でありながらも祭神として細川家の藩主は祀らず、代わりに細川家の前に肥後を治めた清正公を近代になって祀っている。細川家の家臣が再建した真玉八幡宮でも境内に清正公を祀る錦山神社が造られている。そして、細川家が治め、その後、細川忠利の義兄弟である小笠原忠真が治めていった中津市にある大法寺も細川家の時代に開かれ、それが縁で後に清正公を祀ったと考えられる。

細川家以外でも稲葉家や毛利家も清正公を祀っていた。臼杵市の瑞祥教会（こども園）に祀られている清正公は、稲葉家に嫁入りすることになった細川多羅が熊本からも持ってきたものだといわれている。この伝承が成立し、残されてきた背景には、臼杵藩三代藩主・稲葉一通が加藤家改易の際、熊本にある八代城の在番を務めていたことから細川家同様に清正公信仰という形で加藤清正に対して敬意を示すことによって、「加藤家」関連の揉め事を最小限に抑える意味合いもあったのではないかと推測された。

また、佐伯市にある久成寺は、正保元年（1644）に日蓮宗信者たちによって、清正公を祀る本妙寺から日善上人を招聘して建立された寺であった。佐伯藩２代藩主･毛利高成は、寛永９年（1632）５月、加藤家改易後の城番を務め、帰途についてから発病し、同年 11 月７日に急死した。その後、佐伯藩から久成寺の建立の許可が得られたといわれている。この背景には、加藤家改易に関与したことにより加藤清正が毛利高成を祟ったのではないかという考えが藩の中にあったのではないか、あるいはそれに準ずるものがあったのではないかと推測する。それによって、清正公信仰を佐伯市でも広げることにつながったのではないかと考える。しかしながら、管見の限り、それを裏付ける文献資料は残っていない。ただ、久成寺が藩と独特の緊張感を持っていたことを伝える伝承が残っている。

増村隆世の「佐伯誌記（四）」によれば、それは下記の話だという。久成寺の２世・日達が藩主の２人の子どもが病篤い時、日蓮の尊像に祈祷をして４年の命を伸ばす事が出来た。そして、

4年後、再び子どもたちが危篤になり、藩は再び祈祷を命じた。同じ祈祷は許されないと日達は断ったが、藩が許さず、しぶしぶ祈願をすると日蓮の尊像は怒り、日達を本堂から投げ出した。その後、日達は行方不明になったといわれている（増村 1962 p69 ～ 70）。

藩の命令を受けても仏（日蓮）の教えは守らなければならないという考えが表れている。日蓮宗の中の不受不施派の考えを形にしているようにも受けとめられる。福西大輔は、清正公信仰の広がっていく中で不受不施派の影響も大きかったのではないかと指摘している（福西 2012 p120 ～ 127）。

５、終わりに

今回の調査で分かったことは、以下のことである。大分県下で清正公を祀りはじめた理由として最も多く見られるのが、肥後藩の細川家との関りを理由とするものであった。

細川家が肥後藩に入封する以前、加藤家が肥後藩を治めていた。加藤家は清正の息子、忠広の時代に改易になった。その後、中津藩から小倉藩に移ってきていた細川家が肥後藩を治めた。そのため、肥後領内には加藤家、特に加藤清正への信愛の念を持った人もいた。こうした者たちの細川家への不満が露になった時、かつての肥後の統治者である加藤家、加藤清正への賛美が生まれた。実際、細川家への不満から城下で打ちこわしが起きた時には、その首謀者が清正の亡霊だという噂が広がった（福西 2012 p102 ～ 106）。また、阿蘇で一揆が起きた時には「加藤家時代の税制」に戻すことが目的で起きたといわれている（蓑田 1977 p8,15）。

これらのことから細川家は、肥後本国はもちろん、離れた大分にある飛び地で「加藤清正」もしくは「加藤家」という名のもので、一揆や打ちこわしなどのトラブルを起きることを恐れて、清正公を手厚く祀り、それを維持してきたと考える。清正公信仰を細川家が支持することにより「加藤清正」や「加藤家」が細川家への不満の吐き口として、領民や旧家臣団などから使われることを避けるためなのではなかろうか。

また、同様な理由で、加藤家の改易に関与した臼杵藩や佐伯藩でも清正公を祀るようになったのではないかと考える。伝承ではあるが、佐伯藩でも加藤家の家臣が領内にいて、清正公の信者であったという話がそれを裏付けている。伊予松山藩蒲生家の記録では、加藤家改易の際に幕府の要請で縁戚である蒲生家が家臣の一部を引き受けた（宇都宮 2021）。その愛媛県（伊予）には今も清正公を祀る寺社が数多く見られる。

このように見てくると、加藤家改易によって、加藤家の家臣や所縁の者たちが各地に散ったことが、九州をはじめ、西日本で清正公を祀るようになっていった要因の一つではないかと推察できる。特に肥後国に隣接していた土地への影響は大きかったと思われる。その影響が大分県内に清正公ゆかりの寺社を生み出し、維持させたのではないかと考える。

今後の課題として、この仮説を裏付ける文献的な史料の調査と、幕府の直轄領として発展した日田藩における清正信仰に関しても調べていきたい。

［註］

（１） 大分県統計ポータルサイト（https://www.pref.oita.jp/site/toukei/r0320.html） アクセス 2023 年 10 月 3 日

（２） 著者の現地調査（2023 年 8 月 3 日・ほか）による。

（３） 著者の現地調査（2023 年 8 月 29 日・ほか）による。

（４） 著者の現地調査（2023 年 8 月 29 日・ほか）による。

（５） 著者の現地調査（2021 年 11 月 12 日・ほか）による。

（６） 著者の現地調査（2023 年 9 月 7 日・ほか）による。

（７） 著者の現地調査（2021 年 11 月 5 日・ほか）による。

（８） 著者の現地調査（2023 年 9 月 17 日・ほか）による。

（９） 著者の現地調査（2021 年 10 月 8 日・ほか）による。

（10） 著者の現地調査（2021 年 10 月 22 日・ほか）による。

（11） 著者の現地調査（2023 年 5 月 20 日・ほか）による。

（12） 著者の現地調査（2023 年 8 月 21 日・ほか）による。

※調査年月日がないものは『加藤清正公信仰』などに基づく。

参考文献

池上本門寺編 1981 『日蓮宗寺院大鑑』 大本山池上本門寺

稲葉継陽 2007 「加藤清正・忠広・細川忠利の政治と肥後の百姓」 熊本県立美術館 『熊本城築城 400 年記念 激動の三代 ―加藤清正・忠広・細川忠利の時代―』 熊本城築城 400 年記念展実行委員会

宇都宮匡児 2021 「蒲生家「分限帳」諸本の基礎的考察」 谷徹也編著 『シリーズ・織豊大名の研究 9 蒲生氏郷』 戎光祥出版

大分県立歴史博物館 2018 『大分県歴史資料調査報告 5』 大分県立歴史博物館

高野信治 2003 「武士神格化一覧・稿（上・東日本編）」 九州文化史研究所編 『九州文化史研究所紀要』47 九州大学九州文化史研究所

高野信治 2005 「武士神格化一覧・稿（下・西日本編）」 九州文化史研究所編 『九州文化史研究所紀要』48 九州大学九州文化史研究所

高野信治 2019 「病傷治癒信仰のなかの武士 ―＜治療神＞という見方―」 九州文化史研究所編 『九州文化史研究所紀要』48 九州大学附属図書館付設 記録資料館 九州文化史資料部門

高原三郎 1974 『大分の神々』 双林社

日蓮宗大分県教化センター 2017 『日蓮宗大分県ゆかりの神さま仏さま』 日蓮宗大分県教化センター

二宮修二 2020 「大将軍神社」 挾間史談会『挾間史談 7』 挾間史談会

福西大輔 2012 『加藤清正公信仰』 岩田書院

山田貴司編著 2014 『シリーズ・織豊大名の研究 2 加藤清正』 戎光祥出版

増村隆世 1962 「佐伯誌記（四）」 大分県地方史研究会『大分縣地方史』 No.43-44 大分県地方史研究会

増村隆也 1967 「佐伯雑記（七）」 大分県地方史研究会『大分縣地方史』 No.47 大分県地方史研究会

蓑田勝彦 1977 「肥後藩の百姓一揆について」熊本史学会『熊本史学 49』 熊本史学会